

# 新入生 TOEIC の結果分析から見る本学英語教育の今後

小塚良孝（愛知教育大学外国語教育講座）

建内高昭（愛知教育大学外国語教育講座）

## Remarks for the improvement of English education at AUE from an analysis of the results of TOEIC for first-year students

Yoshitaka KOZUKA (Department of Foreign Language, Aichi University of Education)

Takaaki TAKEUCHI (Department of Foreign Language, Aichi University of Education)

**要約** 本稿では、2005 年度より本学全一年生を対象に年二回実施されてきた TOEIC の結果の分析から、本学における今後の英語教育に関して留意すべき点を指摘する。

**Keywords** : TOEIC, 大学入試センター試験, 一年生

### 1. はじめに

本学では 2005 年度より全一年生を対象に TOEIC を年二回（前後期各一回）実施してきた。<sup>1</sup>本稿では、特に 2008 年度入学生について、この TOEIC の結果と大学入試センター試験（以下、センター試験）の英語の成績を比較分析し、そこから認められる幾つかの注目すべき傾向を指摘するとともに、今後の本学における英語教育に関して留意すべき点を指摘する。なお、本稿で使用されるセンター試験英語の成績は、所定の手続きを経て使用を許可されたものである。

### 2. センター試験英語と入学後の TOEIC の成績の相関関係（全体）

本節では、2008 年度入学生に着目して、センター試験英語と TOEIC の成績を比較する。センター試験の点数はリスニングも含めた点数（250 点満点）で比較し、171 点以上の学生を分析対象とする。2008 年度の TOEIC は、前期は 7 月、後期は 12 月に実施したものである。以上の条件で両試験の成績を比較した結果を示したのが以下の表 1 と図 1、2 である。表 1 はセンター試験得点層別の TOEIC 平均スコア、図 1、2 はセンター試験得点層別の TOEIC スコア分布を示したものである。これらの図表から、学生の英語力にはかなりの幅があること、また、センター試験英語の得点と入学後の TOEIC のスコアは概ね比例していることがわかる。加えて、前後期の TOEIC のスコアの差についても興味深い傾向が認められる。つまり、表 1 が示すように、おおよその傾向として、前期の TOEIC で比較的高スコアの層（センター試験では 201 点超の層）において後期の TOEIC でスコアが上昇する割合が高い。

表 1 : 2008 年度センター試験得点層別の TOEIC 平均スコア

センター試験得点	171-180	-190	-200
TOEIC 前期(7月)	364	390	406
TOEIC 後期(12月)	362	377	406
TOEIC 前後期差	-2	-13	±0
TOEIC 後期スコア増加者率 (%)	46	38	43

センター試験得点	-210	-220	-230	231-
TOEIC 前期(7月)	437	467	488	596
TOEIC 後期(12月)	442	468	508	605
TOEIC 前後期差	+5	+1	+20	+9
TOEIC 後期スコア増加者率 (%)	52	55	46	29

図 1 : 2008 年度センター試験英語得点層別の前期（7 月）TOEIC スコア分布

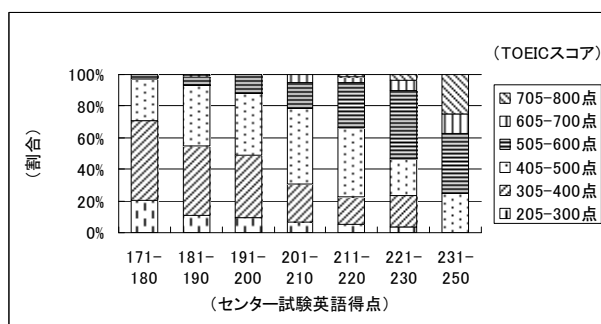
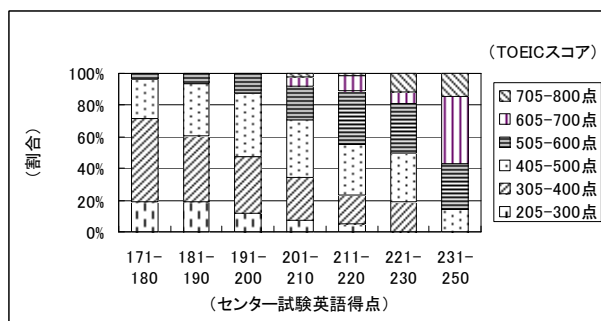


図 2：2008 年度センター試験英語得点層別の後期（12 月）TOEIC スコア分布



### 3. センター試験英語と入学後の TOEIC の成績の相関関係（専攻・選修・コース別）

前節では、2008 年度に焦点を当て、センター試験英語と入学後の TOEIC のスコアが概ね比例していること、また学生の英語力にはかなりの幅があることを示した。本節では、同じく 2008 年度を取り上げ、専攻別（選修・コースも含めて「専攻」と言及する）に両者の関係と比較する。

以下の表 2 は、センター試験英語の平均点の上位十専攻について、入学後の TOEIC の平均スコアを示したものである。TOEIC の平均スコアは、各専攻でセンター試験を受験した者のみを対象としたものである。

表 2：専攻（選修・コース）別に見た 2008 年度センター試験英語の得点と TOEIC のスコア

専攻	センター	TOEIC7	TOEIC12	7/12月の
	得点	月	月	差
A	213.6	532.9	554.4	+21.5
B	209.7	660.7	681.4	+20.7
<b>C</b>	<b>204.0</b>	<b>417.3</b>	<b>376.1</b>	<b>-41.2</b>
D	200.7	438.1	440.5	+2.4
E	196.5	465.6	470.4	+4.8

F	194.8	420.4	423.8	+3.4
<b>G</b>	<b>193.9</b>	<b>448.2</b>	<b>479.8</b>	<b>+31.6</b>
H	193.2	450.2	405.5	-44.7
I	190.2	372.5	376.2	+3.7
J	189.1	348.1	332.0	-16.1

表 2 が示すように、専攻別に見ると、必ずしもセンター試験の平均点と TOEIC の平均スコアは比例していない。この点で特に注目されるのは、専攻 C と専攻 G である。両専攻学生のセンター試験平均点は同程度（専攻 C=204 点、専攻 G=193.9 点）であるが、入学後の TOEIC のスコアの推移は対照的である。専攻 G では TOEIC 平均スコアは後期に大きく上昇するが（448.2→479.8）、専攻 C の平均スコアは後期に大きく下がり（417.3→376.1）、後期の両専攻の平均スコアでは 100 以上の差が生じている（専攻 C=376.1、専攻 G=479.8）。

この二専攻は他年度（2006、2007 年度）でも同様の傾向が認められた。つまり、表 3 に示したように、専攻 C と専攻 G は、他年度でも、センター試験平均点は同程度でありながら、入学後の TOEIC のスコアでは大きな差が生じている。いずれの年度も、入学後間もない前期に実施した TOEIC のスコアにおいて既に大きく差がついていることが注目される。

表 3：他年度センター試験英語と TOEIC の比較

2006 年度			
専攻	センター試験	TOEIC 前期	TOEIC 後期
C	208.3	422.3	285.0
G	207.3	473.8	516.4

2007 年度			
専攻	センター試験	TOEIC 前期	TOEIC 後期
C	200.6	368.8	354.2
G	207.7	445.8	467.1

専攻 C は外国語との関係が薄く、専攻 G は外国語との関係が深い専攻である。このことから、上記の差の要因の一つとして、学生の外国語に対する関心や将来的な必要性（に対する意識）の差が考えられる。

### 4. 考察

以上、本学一年生の TOEIC のスコアとセンター試験英語の得点の比較分析を行い、そこから認められる幾つかの注目すべき傾向を指摘した。この分析から本学におけるこれからの英語教育を考えた場合、留意すべき点が二点指摘される。一つは、習熟度別（または目的

別) クラス編成の導入の必要性である。2節で示したように本学の学生間の英語力の差は大きい。現在は英語のクラス編成において習熟度が考慮されていないため、同一クラスの学生の英語力にかなりの幅が生じうる。習熟度を考慮したクラス編成を行い、各クラスで習熟度に応じた明確な目標を設定することで、より教育効果の高いクラス作りが可能になると考えられる。例えば、2008年度の分析対象学生では、センター試験で171-200点、201-230点、231点以上の三グループに分けることで授業での達成目標を立てやすくなると思われる。

二点目は、英語学習に対する一層の動機付けの必要性である。3節での分析から、センター試験受験時の英語力が同等であると考えられる学生でも、英語に対する考え方や関心によって、入学後、早い段階で英語力に大きな差が生じ、その差は入学後に広がることが示された。このことから、英語学習に対する動機付けをできるだけ早く行うことの重要性が、改めて指摘される。例えば、2011年度からの小学校外国語活動の必修化に伴い、これからの小学校教員は専門の教科に関係なく、英語と関わる可能性が高いわけだが、このような将来における具体的な英語の必要性を今まで以上に積極的に学生に認識させる必要があると思われる。

## 5. 結語

以上、本学学生に一年時に実施している TOEIC のスコアの分析から、本学のこれからの英語教育において留意すべき点を指摘した。

## 注

---

<sup>1</sup> 団体特別受験制度 (IP テスト) を利用した。

## 謝辞

本研究は、学長裁量経費による成果の一部である。